

対談「余白を残すことで広がるものづくりを目指して」  
A-POC ABLE ISSEY MIYAKE 宮前義之×長塚圭史

横浜で「活字」を作る 築地活字

〈REVIEW〉川添史子、金原瑞人、金平茂紀、椿直樹、白井晃

〈神奈川へ、会いに〉あやせものづくり研究会

KAATな人の行きつけ／公演スケジュール

# KAAT PAPER

神奈川芸術劇場 Beyond Theatre  
'25 春  
特集 ものづくり



## 宮前義之 × 長塚圭史

## 「余白を残すことで広がるものづくりを目指して」

「ひらかれた劇場」を掲げ、劇場を拠点に新しい試みを行うKAAT神奈川芸術劇場。今回は、〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉のデザイナー、宮前義之さんを迎え「ものづくり」をテーマに対談。異分野との協業やテクノロジーを駆使し、新たな服づくりへと挑戦し続ける宮前さんのアイディアの原点を紐解きながら、クリエイションのあり方や地域との関わり方など、服と舞台のつくり手視線での思いを語り合いました。

文＝前川あかね 写真＝原田教正



**長塚** 宮前さんが手がけている〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉では、革新的な服づくりの試みをされていますよね。今回は、そのものづくりのアイディアの原点を聞いてみたいと思いまして。服づくりはどのようなきっかけで始めたのですか？

**宮前** 両親が絵描きで、幼いころから欲しいものは自分でつくりなさいという家庭環境だったんです。家のなかに積み重なっている箱やガラクタで、おもちゃをつくったりして。それが、最初のものづくりのきっかけですね。それから、私服の高校に進学したというのが大きな転機になったように思います。

**長塚** 僕も高校は私服でした。

**宮前** 本当ですか！ 私服のいいところといえば、学校が終わったらそのまま遊びにいけるところですね。

**長塚** そうそう。誰にも学校帰りだと疑われないですし。最高でした。

**宮前** それで、学校帰りにいろいろな舞台を観に行っていましたから(笑)。

**長塚** コンテンポラリーダンスをよくご覧になっていたそうですが、最初に観た舞台は？

**宮前** といっても、最初から舞台に興味があったわけではないのです。たまたま知り合いにいただいたというチケットを母から貰い何かのコンサートに行ったのが始まりで。それからアルバイトをしたお金で舞台を観に行くようになったんです。草月会館で、フランスの当時で言うヌーヴェル・ダンスの舞台を初めて観たときは感動しましたね。音楽もかっこよくて、照明やセットも素敵で。そこから通うようになりました。特に日本では勅使川原三郎さんが好きでしたね。でも観るものは、チケットぴあのボックスに貼ってある情報から直感で選んでいて、多種多様な作品を観ました。

**長塚** なかなか高校生ですね。

## 服づくりへの衝動と三宅一生との出会い。

**宮前** じつは服をつくるきっかけが舞台を観はじめたことにも関係しています。高校1年のときにKENZOのファッションショーがあったのですが、どんなものかなという程度の思いで観に行ってみたら、そのスペクタクルなショーに衝撃を受けて。服をつくりたい衝動にかられて、ショーの帰りに渋谷駅近くの生地屋に直行しました。とりあえず生地と500円で売っていた型紙を買って、そこから独学で服づくりを始めたんです。古着屋に行きブランドの服を買ってきて分解したり、見よう見まねで自分の服をつくっていました。

**長塚** すごい10代ですね。

**宮前** かなり変な服をつくって着ていましたね。だんだんと売っている生地ではつまらなくなり、靴の裏に絵の具を塗って布の上に足跡をつけたりしていました。今はネイビーしか着ないのですが、当時はわりとすごかったです。

**長塚** 今はネイビーしか着ないんですか(笑)？



**宮前** いろいろな服を着てきましたが、ネイビーが自分に一番似合うと思うようになりました。当時は、現代アートも好きで、谷中にあるSCAI THE BATHHOUSEによく通っていました。いつも面白い展示をしているギャラリーで、そこに変な服を着た自分がよく現れるので、ギャラリストの白石正美さんも覚えてくださって。ある日「〈ISSEY MIYAKE〉を知っている？」と聞かれ、東京でのショーに連れて行っていただいたことがあったんです。通常ファッショショでは、キャスティングで選ばれたモデルが直前に服を着て、指示された通りに歩く。でも〈ISSEY MIYAKE〉のショーでは、プリーツの服

を着たモデルやミュージシャンたちが出演していて、身体の動きに反応して服の表現が変わり、服がとても生き生きしていたんですよ。モデルの表情も自然で。それが会場全体に空間伝播してくる。服でこれだけ人が生き生きできるのかと感動しました。会場で三宅一生さんに挨拶をする機会があり、その時に私が着ていたのが、生地を燃やした服で。

**長塚** えっ！？ 生地を燃やした服って？

**宮前** ポリエステルは火で炙ると生地が全体的にシュリンクするんですよ。そのクシュクシュと燃やしたシャツを着ていたので、三宅さんに興味をもっていただきました。その数週間後に、ウィリアム・フォーサイスさんが振り付けをしているフランクフルト・バレエ団の公演で、偶然にも三宅さんにお会いして。「あ、あの時の子」みたいなことから話を少ししていただき、服を勉強しているなら来てみたらと〈ISSEY MIYAKE〉の展示会の案内をいただいたんです。それが三宅さんとの最初の出会いでした。どの世界もそうですが、基本ができていないと何もできないということに気がつき、高校卒業後は服飾の学校へ行き、3年間服づくりの基礎を勉強しました。

**長塚** 服飾の学校を卒業後に〈ISSEY MIYAKE〉へ？

**宮前** いえそんなことはなく。まだ、いろいろなことに興味があって、絞り切れてなかったんです。そこで一回服づくりから離れて、お金を貯めてニューヨークに行きました。当時は数ドルで観られる舞台や演劇、ダンスがあちこちでやっていて、日々何かを観に行っていましたね。

**長塚** 何歳ぐらいの時ですか。

**宮前** 20歳ぐらいでした。ただ、ニューヨークの街にはヒエラルキーもあって。自分の力も足りなかったですし、もちろん資金もない。何もできないままここにいても楽しいだけで終わってしまう。そうした焦りは感じていました。ですが、今までにないものをつくりたいという気持ちはずっともち続けていて。そんなある日、三宅さんが〈A-POC〉を立ち上げたという記事をたまたま目にしたんです。デザイナーがすべてをつくるのではなく、最終的には着る人がそこに参加できるものづくりをするという、まったく新しい服づくりの発想を述べられていて、ショックを受けましたね。身体という立体に沿って、どう服をあてがっていくかという西洋の文脈のうえでの服づくりが基本で、この



場所にはこの服というようなTPOに服を合わせるという固定観念がありました。それを着て根底から覆されましたね。ワンピースが1着あれば、それを着てパーティーに行けますし、ダンスをしたければ踊ってもいい。ヨガをしたり、家でくつろいだりしてもいい。〈ISSEY MIYAKE〉の「一枚の布」の哲学です。使い手に委ねられるところがある。舞台もそうだと思うんです。映像では絶対に表現できない見立ての空間が広がっていて。無限の想像が広がっていくからこそ、表現が面白くなる。それは、“余白”みたいなものがあるからなんだと思います。自由にみんなの解釈が変わる、だからこそ想像を超えたものが生まれていくという。

## 異分野との協業から生まれる新しいものづくり

**長塚** 高校生の時の出会いから考えると運命的ですね。〈A-POC〉の立ち上げから宮前さんは参加されたのですか。

**宮前** ちょうど〈A-POC〉を本格的に始めるときに入りました。

**長塚** 〈A-POC〉のプロジェクトや三宅さんのインタビューを読んだのですが、言葉だと、何のことだろう？ というのもあって。でも、その“わからない”部分が魅力なんですよ。

**宮前** そうなんです。わからないのがいいんです。おそらくこれは私の解釈なのですが、三宅さんは「一枚の布」を掲げてきたけれど、答えが一つではないからこそ、ずっとその本質を探索し続けていたんじゃないかと思います。三宅さんからは服づくりを通じて、社会を見つめつながっていくことの大切さを学びました。異分野や異業種の専門家と協業でものづくりをする〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉をこの会社で立ち上げたのには、そうした背景もあります。



**長塚** 医療から食、宇宙、建築と、協業の対象は幅広いですよ。どのように協業者とつながって、アイデアを発展させていくのですか。

**宮前** 直感しかないです。例えば、医療関係の人と話すと、現場の課題みたいなものが見えてきて。私も定期的に健康診断に行っていますが、そこで病院特有の青い服に着替えますよね。もうそれだけで、不安と一緒に調子が悪くなるような気がして。そうしたところを、デザインの力で何か解決できないかと考えたりします。着るものの一つで気持ちも変わる。心と身体の調和について捉えた時に、健康とは何かをあらためて考えています。デザイナーにはおそらく二つのタイプの人っていて、自分の内面に向き合いそれを表現としてかたちにする人と、自分の外との世界にある見たことのないものを追い求めるタイプと。私は後者で、何かにつながることでできると、そこに新しい発見があって、実現したくなるんです。

## 答えがない、だからこそ楽しい。

**長塚** 僕も演劇で未知なものに挑戦していきたいと思っています。KAATの芸術監督に就任した時、一定のファンだけが来る劇場ではなく、地域や神奈川県の人たちにひらかれ、巻き込んでいくような劇場にしたいと思って。2月に上演した『花と龍』という舞台では、地元の商店街の人たちと組んで、舞台に屋台をつくったんです。開演前にお客さんは舞台上に上がることができ、実際に食べ物や飲み物が買えて、そこで飲み食いできるようにして。もちろん上演中も桟敷席や客席で飲食ができます。

**宮前** 斬新ですね。

**長塚** かつての芝居小屋は、そうしたお祭りのような一体感があったと思うんです。これまで演劇に触れたことのなかった商店街の人が手伝ってくれるだけでなく、観に来てくれたり、結構盛り上がりましたね。当然、いろいろな葛藤はありました。未知なものに対して本当にできるのかと突きつけられることもありますし。でも、蓋を開けてみないとわからないならやってみたいと思う。先ほどの話で出てきた服を着る側に残されたスペースは、まさに僕らが考えているところでもありますね。上演中、一刻一刻とすべてに事件が起きて、舞台上にも飾り込んだ舞台装置に映像にと、視覚的な情報にあふ



れた、観客に考える時間を与えないような表現もいいけれど、僕はやっぱり余白のあるものがいい。演劇やダンスもそうですが、基本的に何もない舞台でも、そこから創造された世界がお客さんのなかに広がるので。

**宮前** まさにそうなんですよ。

**長塚** 劇場は、この嘘を信じてくれるお客さんとの契約みたいなもの。観終わったあとに、面白かったと言ってくれたお客さんがすごいんだよね、となっているのが最高なんです。こっちが投げかけた余白のスペースを創造したのはお客さんのだから。だから、正解や答えは本当にないんですよ。

**宮前** 答えがないこと、それが楽しいですよ。

でも、いろいろな人たちと会話しているうちに、その答えがないところからまた別の景色が見えてきたりします。私たちも、地域とのつながりは大切にしていきたいと思って、近所の保育園の子どもたちと一緒に服づくりのワークショップを行いました。〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉のテキスタイルにチームをかけて、人形の服を自由につくってもらいました。そうした幼い頃の体験が、この先の何かのきっかけになれば素敵ですし、我々も想像もしてなかったアイデアを貰ったりしています。日本全体のことを考えると何もできなくなってしまうですが、オフィスの近くの富ヶ谷だったらできるんですよ。

**長塚** そうそう、手の届く、近いところから少しずつ。テキスタイルから服が生まれてくるようですが、デザイン画とかは描いたりしないのですか？

**宮前** 私はあえて描かないです。布はそれぞれに特性があって、用い方次第でまったく異なるものになるんです。固定観念をすべて外して、この布が身体はどこにおさまるのが一番美しいのかを探ります。逆に固定観念があると、ここに襟をつくってとか、窮屈になってしまいます。〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉の布は余白の塊。服だけでなく、いろいろな可能性を秘めているからこそ、そこを大事にしたいと思っています。

**長塚** 話は変わりますが、世界的なブランドを背負ってものづくりをされている宮前さんは、ご自身のアイデアとビジネスのすり合わせをどのように考えているのですか。

**宮前** 〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉では、ものづくりチームとビジネスチームが同じスペースで共存して仕事をしています。時として考え方で対立することもあります。そこをあえて一緒にすることで、同じヴィジョンで服づくりに向き合うことができるので。

**長塚** それは宮前さんが提案したのですか？

**宮前** はい。独りよがりでもつくっても、実際に着るお客さんと思いがずれてしまったら意味がないです。届けたい相手に届けるまでがデザインの仕事と考えて、つくり手が最後まで責任がもてるものでなければならない。チームが大きくなればなるほど難しくて、そこに苦労したことがありましたね。常に新しいことをしようとしているからこそ、そのバランスは大事だと思います。

**長塚** ちなみにKAATの芸術監督室も制作や広報の一番奥なので、あらゆる話が全部聞こえてくるんです(笑)。

**宮前** 異なる考えや異分野の人と話すことは刺激になります。新しい視点が加わることで、可能性を広げていきたいというのが、今やりたいことの一つ。そう思うと、どんなことでもつながってくるんです。



### 宮前義之 Yoshiyuki Miyamae

1976年東京生まれ。2001年三宅デザイン事務所に入社し、〈A-POC〉の企画チームに参加。2011年から2019年まで〈ISSEY MIYAKE〉のデザイナーを務める。2021年より、異分野や異業種の専門家との協業により「一枚の布」のもつ可能性を広げる新しいブランド〈A-POC ABLE ISSEY MIYAKE〉を始動。アーティストの横尾忠則さんや宮島達男さん、〈SONY〉などの企業とも協業を行う。

# 横浜で「活字」を作る

ものづくりといっても、それは「モノ」だけに限りません。かつて新聞や雑誌の文字は、すべて職人がつくって組んだ活字でした。KAATの宣伝美術や書籍の装丁などさまざまな印刷物を手がける、文字好きのグラフィックデザイナー、吉岡秀典さんと訪ねたのは横浜で100年以上の歴史をもつ〈築地活字〉です。



## 大正時代から続く横浜の活字

1919年6月創業の〈築地活字〉は、今年で開業106年を迎えます。初代の平工太三郎<sup>たさぶろう</sup>が、博文館印刷所(現・共同印刷)と提携し、築地活字の前身となる〈横浜博文館〉を横浜市中区に開いたのが始まりです。

「創業当時はこの辺にもいくつも活字屋さんがあったんですよ。でも今じゃ残すはうちだけになりました。よく奇跡って言われるんですけどね」。そう話すのは、6代目を務める平工希一さん。

その後、1923年には関東大震災、続く1945年には太平洋戦争による空襲を受け、店舗・工場ともに焼失。度重なる受難に見舞われながらも復興を果たし、2010年に現在の社名〈株式会社 築地活字〉になりました。

近年では、デザイナーや作家からの依頼が増えていると平工さん。

「デジタル印刷が当たり前になって、味のある活版印刷がめずらしいんじゃないかな。『きれいに刷らないでくれ』なんて言われますけど、職人のプライドは傷つくんですよ(笑)。やっぱりきれいに刷りたいじゃないですか」



平工希一

Kiichi Hiraku

吉岡秀典

Hidenori Yoshioka

創業100年を超える活字鑄造所〈築地活字〉の6代目。大学卒業後は家電量販店に就職し、25歳の時に家業の経営に着手。趣味は商店街めぐり。

1976年静岡県生まれ。2003年、コズフィッシュ入社。2011年に独立し、デザイン事務所・セプテンバーカウボーイとして活動。2021年よりKAAT神奈川芸術劇場の劇場広報アートディレクションを手がける。



## 職人技を未来につなげる

築地活字で活字の鑄造を担当するのは、御年81歳の大松初行(おおまつはつゆき)さん。19歳からこの世界に入り、鑄造歴58年の大ベテランです。一方で、大松さんを含めても、全国の鑄造職人はわずか4名ほどしかいません。そこで、技術継承をかけて取り組んだのが、動画メディア「ニッポン手仕事図鑑」後援のもと行ったクラウドファンディングです。支援のリターンとして、鑄造体験コースを設定。その時に体験に来た4名の方が、現在も鑄造を手伝ってくれているそう。

「皆さん本業をもって、地下鉄の運転士さんやデザイナーさん、出版社の副編集長兼大道芸人なんてユニークな経歴の方もいらっしゃいますよ。本気で活字を後世に残そうと活動してくれていますね」(平工さん)

また、横浜市も本格的にものづくりの技術や職人の保存に乗りだしています。「横浜マイスター」と呼ばれる、優れた技能職者を認定する取り組みをスタート。大松さんも2022年に横浜マイスターに登録されました。



AROUND

## 国際化する活字の現在

取材に伺った日、ちょうど台湾から新しい母型が届いたところでした。築地活字では約25万字の活字母型を保管していますが、国内で新しくつくることはできないそうです。そんななか見つけたのが、台湾の活版印刷所〈日星鑄字行〉。書体デザインはモノタイプ社のクリエイティブタイプディレクターの小林章さんが手がけています。「一番のこだわりは合字。活字だと、文字と文字が離れちゃうんですね。それを自然につながるようにデザインしてもらいました。真っ直ぐな正体と斜めになっている斜体(イタリック)を組み合わせると、文字同士くっついて見えるんです。これも弊社で鑄造を勉強している方がつないでくれた縁」だと続けます。

「ある見習いの方が台湾に詳しくて、とんとん拍子で話が進みました。将来のことはわからないけど、今はこうして4人の方が鑄造に来てくれています。時代に合わせて経営のかたちを変えながら、長く続けていけたらいいなと思いますね」



▲築地活字さんの活字で印刷。書体名「長宋朝体」

神奈川芸術劇場

KAAT

KAAT

## 吉岡さんの活字への想い

活版への憧れというのはすごくあって、パンフレットなどをデザインする際に、活版のようなかすれ感とか、紙に印刷された時の繊維への染み込んだ感じを再現することが多いです。この工程を僕の事務所では「味わい出し作業」と呼んでいます。本当は活版でできたら一番いいのですが、予算的にも納期的にもなかなかできないこともあって。「活版は現実的に無理だけど、雰囲気だけでも出したい!」と編み出されたのが、コピー機で文字を縮小コピーして、それを再度拡大するという方法。すると縮小した時に用紙の繊維が拾われて、文字の輪郭が粗くなり、独特の「味わい」が生まれるんです。

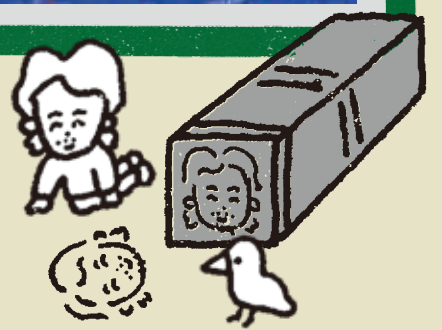


独立する前に所属していたデザイン事務所〈コズフィッシュ〉の社長でありブックデザイナーの祖父江慎さんが正真正銘の“文字狂い”でした。祖父江さんは日本のブックデザインの第一人者とも呼ばれていて、今でも若手デザイナーたちに憧れられる存在。そんな祖父江さんの事務所には活字で刷られた資料はもちろん、古い本もたくさんあって。コズフィッシュで働いていると、古い書籍から文字をスキャンして使うことも多く、このやり方って面白いなと常々感じていました。元々専門学校時代から印刷やフォントには興味がありましたが、活版や書体への憧れのようなものはコズフィッシュで培われたところが大いだと思います。



KAATPAPER

▲築地活字さんの活字で印刷。書体名「エングラパーシード」



## 活版印刷とは



Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg

活版印刷とは、金属などでつくられた活字を組み合わせで版をつくり、その上にインクをのせ、紙を版に押しつけることで印刷する技法のこと。いわゆるハンコのようなものをイメージしてみてください。活版印刷が発明されたのは15世紀のドイツ。金細工師ヨハネス・グーテンベルクによって生みだされました。その後19世紀になると産業革命に突入し、活版印刷機が改良されたことで大量生産が可能に。しかし20世紀後半になると、オフセット印刷やデジタル印刷が普及し、活版印刷は衰退してしまいます。日本では明治時代以降に本格的な導入が始まり、新聞や書籍、行政文書などさまざまな分野で活躍しました。初めての活版印刷による新聞が発行されたのは1871年(明治4年)のこと。活版印刷の導入で新聞の発行が格段に速くなり、日本全国に情報を広める手段として発展したといわれています。実際に活版印刷を行う際には、まず活字を選ぶ(拾う)ところから始まります。活字は一つひとつ独立した言葉になっていて、これをピックアップする作業を「文選」といいます。次に選んだ活字を「組版枠」という金属製の枠にセットし、レイアウトを組んでいきます。その際、字間や行間をバランスよく配置するのが職人技の光るところ。組み終わったら版を紐で固定し、印刷機にセット。ローラーでインクをつけ、圧力をかけて紙に転写すれば完成です。



# REVIEW



KAAT×国立劇場

## 〈つたえつなぐ〉『観てよみ解く～実演&レクチャー～』

2024年11月16日(土) — 11月17日(日)  
KAAT神奈川芸術劇場 〈中スタジオ〉

### 伝統芸能の身体性と息遣いを すぐ近くで体感せよ

文=川添史子(編集者・ライター)

伝統芸能の取材機会が多いこともあり、初心者の方に「最初に何を観ればいいですか?」とよく聞かれる。好みや年齢、たどってきた人生で“出会うべき作品”は人それぞれなので、じつはこれほど悩ましい質問もない。しかし「近距離で芸能の身体表現を体感せよ!」というアドバイスは有効かもしれない——そんなことを考えたのは、〈つたえつなぐ〉『観てよみ解く～実演&レクチャー～』で、わくわくする2日間を過ごしたからだ。

同企画は、KAATと国立劇場がタッグを組み、伝統芸能にフォーカスした体験型レクチャー。会場である中スタジオに入ると、客席の前に設置されたコンパクトなアクティングスペースに、所作台(足運びがスムーズとなり、足拍子が鳴るように設計された台)が敷かれていた。観客はこの、削ぎ落とされたシンプルな空間、しかも近距離で、演者の息遣いを感じながら鑑賞できる……という趣向だ。

1日目は「日本舞踊編」で、出演者の藤間蘭黄自ら日本舞踊の歴史や特色、あらすじなどを解説しながら、二つの作品を踊った。まず感じたのは、さまざまな情報を頭に入れた直後に実演を観ることで、理解度／解像度が倍増したこと。潔いほど「何もない空間」に、衣裳やかつらをつけない素踊りで、力強くたたずむ松(『老松』)や浅草のにぎわい(『都風流』)が立ち上がっていく。振りの一つひとつを濃く味わうことで想像力もどんどん膨らみ、視線、指先、足先まで神経が行き届いた、舞踊家の表現力に感嘆した。

2日目は早池峰大償流土沢神楽保存会(岩手県花巻市)による「神楽編」。独創的な造形&カラフルな衣裳を身に着けた演者が、しっかりと腰を落として舞う迫力、生演奏の太鼓(胴)、鉦、笛の音に、自然と胸が高鳴る。神話の世界に触れるような、血が騒ぐような、うれしくなる時間。舞手の一人が、衣裳を脱ぐと少年だった驚き! 間に挟まれたトークでは、風土に根ざした文化を守る、生活者たちの言葉が印象深かった。

同じ伝統芸能でも扇の扱い方がまったく違ったのは発見で、2日間通った甲斐があるというもの。1日目は舞踊評論家の岡見さえ准教授(共立女子大学 文芸学部)、2日目は平原慎太郎(ダンサー・振付家・OrganWorks主宰)がナビゲーターとして参加し、バレエやコンテンポラリーダンスからの視点が織り込まれていくのも興味深かった。伝統が内包する前衛性に気づいていく楽しさはそのまま、愛好者以外にも開いていく可能性だろう。

SNSで簡単に地球の裏側のダンスが見られる現代だが、“ワンダー”の入り口は、意外なほど近くに存在する。

川添史子 Fumiko Kawazoe

演劇誌『シアターガイド』を経てフリーの編集者・ライターとしてあらゆるステージパフォーマンスを取材。『リンネル』(宝島社)でステージページ、ステージナタリーで歌舞伎の連載を執筆中。

<日本舞踊編>  
出演:藤間蘭黄  
ナビゲーター:岡見さえ(共立女子大学 文芸学部 准教授)  
<神楽編>  
出演:早池峰大償流土沢神楽保存会  
ナビゲーター:平原慎太郎(ダンサー・振付家・OrganWorks主宰)



日英国際共同制作 KAAT × Vanishing Point

## 『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』

2024年11月28日(木) — 12月8日(日)  
KAAT神奈川芸術劇場 〈大スタジオ〉

### 容赦なく頭のなかを かき回される快感

文=金原瑞人(翻訳家)

原作:村上春樹(短編「品川猿」「品川猿の告白」より)  
原案・構成・演出:マシュー・レントン  
演出協力:サンディ・グライアソン  
脚色:サンディ・グライアソン、マシュー・レントン  
翻訳・ドラマトゥルク:阿部のぞみ  
出演:那須凜、サンディ・グライアソン、  
伊達暁、エリシア・ダリ、田中佑弥、  
サム・ストップフォード、家納ジュンコ、  
アイシャ・グッドマン、  
エイリー・コーエン(人形遣い)  
アンダースタディー:北川雅

2007年のイスラエル・フランス・アメリカ合作映画『迷子の警察音楽隊』を観た時、字幕の偉大さを実感した。これは、エジプトの警察音楽隊がイスラエルに文化交流で招待されて空港まで行ったところ、迎えがないところから始まるコメディ。必然的に、エジプト人同士はエジプト語、イスラエル人同士はヘブライ語、エジプト人とイスラエル人は英語で話す。字幕なしでは成立し得ない映画だ。

『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』も字幕を使った演出が面白かった。これは村上春樹の短編をイギリスの演出家マシュー・レントンが大胆に組み直したもので、日英の俳優が出演する。舞台では英語と日本語が飛びかい、英語と日本語の字幕が常時、背景に映しだされる。ぼくは30年以上も翻訳をやってきたくせに、英会話はまるっきり苦手で、特に耳が悪いから、英語のセリフが飛びだすと、すぐに字幕に目がいく。ところがたまに、日本語のセリフを聞きながら、英語の字幕にも目がいったりする。そのうえ、最初は、イギリスの俳優が日本名で呼ばれると、「え、てつこさん?」とか、一瞬、戸惑ってしまふ。またすべてが淡々と一人称で語られていく原作と違って、いくつかの場面がぶつ違いになっているため、頭のなかでそれを再構成していかななくてはならない。例えば原作では最後に出てくる5年後のエピソードが芝居では最初にもってこられているし、原作にないエピソードも挿入される。とにかくせわしいのだが、小劇場ならではのスピーディな演出と巧みな場面転換に驚くうち、違和感なく一つの世界に取り込まれてしまった。



撮影=細野晋司

金原瑞人 Mizuhito Kanehara

翻訳家。訳書に『月と六ペンス』など、エッセイ集に『翻訳はめぐる』など、日本の古典の翻案に『雨月物語』など。ブックガイドに『13歳からの絵本ガイド Y&Aのための100冊』など。

KAAT×ケダゴロ×韓国国立現代舞踊団

## 『黙れ、子宮』

2024年12月13日(金) — 12月15日(日)  
KAAT神奈川芸術劇場 〈大スタジオ〉

### わっ! 60年代の地下演劇が今、ダンスしてる!

文=金平茂紀(ジャーナリスト)



撮影=大洞博靖

「へそ曲がり! 蛆虫! できそこない! 虱野郎! どぶ鼠! ド坊主! ひひひ批評家! (サミュエル・ベケット)」というくらい、批評家、ヒーロンカとかには虫酸が走るようになってしまった。僕は批評家ではなく、一人の観客にすぎない。ケダゴロのことは本当はよく知らない。主宰者の下島礼紗さんのことも。ケダゴロの舞台を初めて見たのは、世田谷のシアタートラムでの『代が君・ペロペロ・ケルペロス』公演だった。たまたまふらりと劇場に

入ったのだ。衝撃を受けた。同時に、強烈な既視感のようなものに襲われた。こりゃあ60年代後期の地下演劇が、21世紀の今、突然変異みたいに目の前に現れて、しかもダンスなんかしているじゃないか。いいぞ! 寺山とか唐、暗黒舞踏初期みたいに、世界への違和感の表明のごとく屹立していた地下演劇のあの匂いがステージに漂っていた。だからケダゴロに関わる次の舞台は絶対に見ようと思っていた。

KAATとケダゴロ、韓国国立現代舞踊団(KNCD)が共同制作した『黙れ、子宮』がそれ。韓国のダンサーたちの存在感。とりわけKNCDの二人の女性ダンサー(ユン・ヘイジンとイム・ソジェオン)の毒味を含んだペアでの動きの魅力にぐいぐい引き込まれていった。クチャ、クチャ、クチャと音を立てて二人が噛んでいたチューインガムを何度か交換するシーンには、うん、これ以上の自由はないよね、と思わず拍手しなくなった。下島礼紗さんの発する言葉は、語彙がとても地下演劇的というか、独特の持ち味があって、それこそ大昔の土方巽が書いた文章みたいなぶっ飛び方を感じたことが何度もあった。<宇宙に身に着けていくとしたら、子宮とキンタマどちらを選びますか>という問い自体がその証左でもある。また次も見たい!

金平茂紀 Shigenori Kanehira

ジャーナリスト。TBSで、モスクワ、ワシントン特派員、『筑紫哲也NEWS23』編集長、報道局長、『報道特集』キャスターなどを歴任。早稲田大学大学院客員教授など教壇にも立つ。日本ペンクラブ言論表現委員長。

振付・演出・構成:下島礼紗  
出演:Yun Hyejin, Lee Daeho、  
Im Sojeong、  
下島礼紗、  
木頃あかね、小泉沙織、  
中澤亜紀(ケダゴロ)  
大貫桃加、小野寺夏音、  
岸本茉夕、小島優花、  
鈴木菜々、麗羅

KAAT×新ロイヤル大衆舎 vol.2

## 『花と龍』

2025年2月8日(土) — 2月22日(土)  
KAAT神奈川芸術劇場 〈ホール〉

### 今を生きる私たちに通じるもの

文=椿直樹(料理人)

昭和の博多に生きた伝説の男、玉井金五郎。

その波乱に満ちた生涯を描いた舞台「花と龍」を観劇した。豪胆さと繊細さ、そしてシリアスが交錯する物語は観る者の心を揺さぶり、舞台上に広がる登場人物の生きざまの美しさが際立った作品だった。

本作品が投げかけるテーマは単なる男の「任侠の美学」や「サクセスストーリー」ではない。

「力」をもつ者の責任、役割、覚悟、仲間との絆、

そしてそもそも「金五郎」がその地位にたどり着くまでのプロセスのなかでの葛藤や時代に翻弄され続ける姿が、今を生きる私たちに通じるものとして強く胸に迫ってきた。

あらためて、自分の立場を照らし合わせ、「人は何のために闘うのか」を考えさせられた。

舞台『花と龍』は豪快な男の物語でありながら、じつは静かに心に沁みてくる内容だった。

また、舞台上には休憩時間などに観客が購入できる屋台が出現したり、客席の合間をぬって演技が行われたり、ストーリーとともに臨場感を味わえるさまざまな工夫があり、貴重な大作を観たという感想で、今でも要所のシーンが鮮明に蘇ってくる作品だった。

私が嘗む「TSUBAKI食堂」で、本作を観る前に長塚圭史氏を招きイベントを開催した際、『花と龍』をイメージしたお料理をコース仕立てで提供させていただいたが、この本作を観たあとでの感覚で料理内容を考えてまったく違った内容になると思う。

機会があれば再び『花と龍』にちなんだフルコースを考案し、提供してみたいと思った。

椿直樹 Naoki Tsubaki

横浜生まれ、横浜育ちの料理人。2003年、横浜野菜の魅力を広く伝えるため「横浜野菜推進委員会」を設立、2009年には神奈川県で初めて農林水産省「地産地消の事業者」に認定される。横浜市庁舎2階「TSUBAKI食堂」を運営しながら、横浜の地産地消をテーマに日々奮闘している。2024年より開催しているKAATマルシェの発起人。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

音楽劇『愛と正義』

2025年2月21日（金）－ 3月2日（日）  
KAAT神奈川芸術劇場 〈中スタジオ〉

作：山本卓卓  
演出：益山貴司  
音楽：イガキアキコ  
振付：黒田育世  
出演：一色洋平、山口乃々華、  
福原冠、  
入手杏奈、坂口涼太郎、  
大江麻美子 (BATIK)、  
岡田玲奈 (BATIK)

愛と肉体の行方

文＝白井晃 (演出家・俳優)

圧倒的なパワープレイで繰り広げられる世界に目を見張っているうちに、観客である私たちは、目には見えない「愛と正義」という概念が可視化されていることに気づかされていく。

山本卓卓と益山貴司がタッグを組むという本作に何が起ころうとしているのかを探らない訳にはいかない。そう思って劇場の席に座った。まるでゲームのキャラクターのコスチュームプレイのように駆け回る俳優たちの姿を見ているうちに、これは私たちが生きる社会にある道徳観や価値観に対するただならない訴えであることがわかってくる。

目の前で愛を語る人々は、自分たちの肉体を駆使して愛の所在を確かめようとする。何しろ、愛などというのは、肉の塊がぶつかり合うパワーゲームでしか獲得できないものなのだから。彼らは、愛の名のもとで行動しながらもその葛藤に苦しみ、どちらの価値が優先されるべきかを肉体を通して観客に訴え、強力に思考をうながしてくる。

山本が投げた直球を、益山は肉体を駆使して打ち返す。この戯曲と演出に、俳優たちは極限まで身体を追い込み懸命に応える。肉体なき世界で生きる私たちは、もはや演劇＝虚構のなかの他者の肉体を通すことでしか自身の身体を実感することができないのだと言わんばかりに。この時点において、既に未来を予見している。



撮影＝宮川舞子

白井晃 Akira Shirai

演出家、俳優。京都府生まれ。早稲田大学卒業後、1983～2002年、遊○機械/全自動シアター主宰。演出家としてストレートプレイから音楽劇、ミュージカル、オペラまで数多くの作品を手がけ、俳優としても活動中。近年の演出作品に『No.9－不滅の旋律－』『パリーターク』など。読売演劇大賞優秀演出家賞、湯浅芳子賞(脚本部門)などの受賞歴がある。2016～2021年、KAAT神奈川芸術劇場の芸術監督。2022年4月より世田谷パブリックシアターの芸術監督に就任。

神奈川へ、会いに

〈 あやせものづくり研究会 〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。第11回は、神奈川県綾瀬市で〈あやせものづくり研究会〉として活動する嶋知之さん(旭工業)、今寿義さん(ナウ産業)、野口裕さん(野口製作所)、佐野則之さん(鎌田理化学器械製作所)を訪ねました。

写真＝石渡朋

**長塚** じつは今回、工業が盛んな綾瀬市に、このような団体があることを初めて知ったのですが、そもそも皆さんが「あやせものづくり研究会」を始めたきっかけは？

**嶋** 僕らはみんな町工場なんです。基本的には企業からの依頼で、いろんな部品をつくったりしているんですが、いつか自社製品をつくりたいという思いがあって、それぞれ遊びのようなかたちでつくっていたんです。うちはカーボンで調理器具を、今さんは鉄鍋というふうに。そんな時、綾瀬市から本格的に商品化しませんかとお誘いがあって、市がデザイナーさんを紹介してくれました。それが始まりです。のちに、佐野さんと野口さんが参加して、今は4人です。

**長塚** 普段は皆さん、どんなお仕事をされているんですか？

**野口** 野口製作所は、精密板金加工を専門にしています。銅、真鍮、ステンレスなど金属の寸法や曲げを0.1mm単位で調整しています。通常はコンピューターを製作する電器メーカーなどに納品していますが、この会ではその技術で、溶接をしない金属の小物をつくっています。

**佐野** うちは鎌田理化学器械製作所といいまして、ガラスのなかでも石英ガラスを扱っています。原料は天然水晶、耐熱温度が1,200℃で純度が99.9％で、研究所や半導体装置メーカーなどの特殊な場面で使われています。ここでは、澄んだ音で乾杯できるグラスをつくっています。

**長塚** それは聞いてみたいなあ。初期メンバーのお二人は？



**今** 私の名前が「今(こん)」なのでナウ産業といいまして、鉄の厚板加工の会社です。綾瀬市との取り組みは私が一番古く、2015年から始めました。綾瀬市はロケが盛んな市で、私もロケ誘致のメンバーなんです。ロケに来てもらうには、お弁当など食が充実してなきゃいけないというので、バーベキュー用に厚さ4.5mmの鉄鍋をつくったんです。鉄板に厚みがあると食材がおいしくなるとか。それにチッカ処理をしているから錆びにくい。それが今のものづくり研究会の商品開発につながっています。

**嶋** 旭工業は日本で数少ないカーボン加工を専門にしています。カーボンは熱に強く、金属を溶かす時の容器や、それを成形する型に使用したりとさまざまな用途があります。この会ではカーボンの塊から削りだした調理器具をつくっています。炭火焼きのように遠赤外線で食材がおいしくなるんですよ。

**長塚** 皆さんのお話を聞いているだけでワクワクします！ 神奈川にこんな素敵な技術があることを僕らももっと知る必要がありますね。

ナウ産業のTetsu Nabe

熱伝導性と蓄熱性に優れ、厚手の鉄板が素早く食材に熱を伝えるから、肉や魚のうまみを閉じ込めジューシーに仕上がる。チッカ黒染めで錆びにくく、傷もつきにくいのでお手入れも簡単。



旭工業のSumi Toaster

このトースターは炭火と同等の遠赤外線でパンを焼けるので、外はカリッと、中はふわふわという理想的な食感を実現。万能プレートなので肉や魚、野菜も、油不要でおいしく仕上がる。



鎌田理化学器械製作所のSekiei Kampai Glass

半導体機器の製造や光ファイバーにも使用される純度の高い石英。グラスに成形するのはすべて職人の手によるもの。劣化しにくいつまでも透明度が高い。乾杯の時は、このグラスの澄んだ音色で。



野口製作所のOri Incense House

銅、真鍮、ステンレスなど金属の特性を計算し0.1mm単位で調整する精密板金の高い技術で、シンプルだが金属の色の経年変化を楽しむ小物をつくる。真鍮は抗菌・抗ウイルス効果もあり。



